

## 語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語（76） (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

旧約聖書・創世記の神による天地創造とそれを見た神の満足(At the first *God made the heaven and the earth ... and God saw that it was good.*)と重なる気もするが、理系科学は無から有への創造(making)・発明(invention)を目指す。一方、文系科学は事の在り方の本的な正しい認識(seeing)・発見(discovery)を目指す。古代ギリシャにその根源を求めれば前者はアリストテレス(Aristotle)風であり、後者は彼の先人で師であったプラトン(Plato)風の認識・発見と言える。本会で用いる意味論の

```
EP 本 I-III
```

の背景にもこの「作ること(making)」と「見ること(seeing)」の2本柱を垣間見る。ポイントだろう。なお、EP 本編纂の基ともなった 17 世紀のチェコの J. A. Comenius 著 *Orbis Pictus* 『世界図絵』の第 1 番目の図絵は「神」(God)であり、最後の 150 番目の図絵は神による「最後の審判」(the Last Judgement)である。神に始まり神に終わるが、舞台として地球上の地・エルサレム(Jerusalem)が記される [本連載前回(75)参照]。

人間は無限の宇宙空間(in outer space)ではなく有限界の地球(on the earth)で事物の在り方を見ているわけで、言語によるその表現の仕方は無限でも状況(situations)そのものが無限・不確定(indefinite)とは考えにくい。有限と考えたい。そもそも Basic 言語の有限個の語彙で世のあらゆる状況が伝えられ得ること自体がそれを象徴するだろう。今回も目(eyes)ではない心の目(mind's eye)で事を see し、発見していきたい。

Trump 大統領は在任 1 期目は終始いわゆる「ロシア疑惑」の問題にさらされていた。1 期目最後の年 2020 年の 2 月に、この疑惑を巡る裁判で検察は Trump 氏の盟友で偽証罪に問われた元選挙顧問の Roger Stone 被告に 7 ~ 9 年の禁固を求刑した。これが Government Recommends Up To 9 Years In Prison For Roger Stone (February 10, 2020) として報道された。

これを知った Trump 氏は「刑が重すぎる」と何度も tweets で反論した。これに対し彼の側近で事の処理に関わっている司法長官 William Barr 氏が Trump 氏の反論は司法介入(judicial intervention)だと苦言も呈した [本連載(15)の(2)で触れた]。今回は次の(1), (2)を合わせた形で見てみる。

(1) This is a horrible and very unfair situation. The real crimes were on the other side, as nothing happens to them. Cannot allow this miscarriage of justice! 😦 (February 11, 2020)

▲「不公平で、ひどいものだ、実際には罪を犯したのは向こう側だが、彼らには何も問われていない、司法の誤審で容認できない！」という内容であった。メディアはこれに連関し Barr 司法長官が ABC ニュース社のインタビューで Trump 大統領を批判する次のコメントを 2 日後に発表した。

cf. Attorney General William Barr on Thursday issued a rare criticism of President Donald Trump, telling ABC News that the president's tweets about Justice Department matters "make it impossible for me to do my job." (February 13, 2020)

すなわち、Barr 司法長官は司法省の問題に関する Trump 氏の tweets は“私が任務を遂行できなくなる”と ABC ニュース社に語ったのであった。いわゆる「三権分立」の原理が問題とされたわけである。

(2) "The President has never asked me to do anything in a criminal case." A. G. Barr. This does not mean that I do not have, as President, the legal right to do so, I do, but I have so far chosen not to! 😊 (February 14, 2020)

▲上の(1)とつながっている。Trump 氏は Barr 氏の言葉 “Trump 大統領は犯罪事件で私に指示をしたことは決してない” をまずは引用して書き、続いて Trump 氏が自分の言い分として「だからといって大統領として指示する権限が私にないわけではなく権限はあるが、これまでそれをしないようにしてきたのだ！」と言っている。この発言は微妙な内容を含んでいる。上の(1)での下線語 situation の中身と関わる。

こういう「権限」やそれに関連もした目には見えない人の心の中に宿る事項を発展的に後で扱うこととし、まずは語釈として今回(1)と(2)をまとめた形で確認してみる。

(1)での太線語で Basic 世界語彙 **crime** は本連載(25)の(1)での確認となるが、morphophoneme (形態音素形) としての PIE etymon は/KREI/とされ原義が「区分けし判断すること」である。元来は「穀物の選別」の意味であった。他の Basic 世界語彙 **credit, secret, secretary** など、また cf. の文中で太線とした非 Basic 語彙 **criticism** なども実は同系 [他の例は拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(128)参照]。paronym (同系語) の見定めは sound (音声) と spelling (文字) の関係をみるいわゆる phonics (フォニックス) に対する知見を養うが、音が関わる限り広くは acoustic (音響的) な見方とも結びつく。

また、(1)での 2 つ目の太線語 **miscarriage** は法律上では「誤審」の意味である。郵便物の誤配(不着)・失策・流産の意味ともなる語である。法律に関連して本連載前々回(74)で言ったが **instrument** には「文書、証書」の意味があることを再確認しておきたい。法律文書の意味解釈は semantics 研究での一注目点となる。今日的には legal [forensic] linguistics (法言語学) / language and the law の専門分野もある。

**miscarriage** に関連し、**carriage** は Basic 世界語彙であるがこれが「振る舞い、身のこなし」の意味で用いられることがある。military carriage (軍隊の身のこなし) などとも言うが、しぐさと関わる Basic の範疇だと言えよう。非 Basic 語彙 **career** (キャリア) なども carriage と同系で「荷車で運ぶこと」が原義であることを本連載(72)の(3)で触れた [さらには同上拙著、第二部、例(18)参照]。

さらに(1)の文中で下線とした **as** は、この場合は **while** (一方) の意味と解すればよい。cf. の文中の太線語 **matter** (問題) は本連載(24)の(1)、また黒人の命に関する BLM(Black Lives Matter)運動との関わりで(50)の冒頭すでに見たのでこれも確認であるが **Basic 世界語彙 material**、さらには **mother** とも同系である。morphophoneme (MP)は/MA/とされ、原義は「食べ物を与える・育てる母親のこと」で、非 **Basic 語彙 masticate** (噛み碎く) なども同系であるがこれは原義を押さえれば納得されよう。謎掛けなら「**material** (材質・資材) と掛けて何と解く?」→「**mother** (母親) と解く」→「その心は?」→「元々の原義(root sense)が育てあげるもので同系語(paronym: word coming from the same root)」のようになる [他の同系語の例は同上拙著、第二部、例(58)参照]。

(2)での太線語 **mean** (意味する) の「意味」とは心の中のことと関わっていて morphophoneme (MP) / morphoglosseme (MG) [形態音素 / 形態言素形] の1つとして/ME/が復元されているが、**Basic 世界語彙 mind** などと同系である。mean の意味は Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* (1923) 『意味の意味』、G. Blocker の *The Meaning of Meaninglessness* (1974) 『無意味の意味』での大テーマである。

なお、「平均」の意味でのプラス **α Basic 世界語彙 mean** も実は同系語 [他の多くの同系語の例は同上拙著、第二部、例(28)参照]。2番目の太線語 **chosen** <choose (選択する・選ぶ) は、元来は「食べ物を賞味する」の意味に由来するというのが定説でもある点は心得ておいてよい [本連載(72)の(3)参照]。そう思えないかもしれないが **choose**, **choice** は実は **Basic 世界語彙 disgust** (嫌悪・嫌悪感)、非 **Basic 語彙 gusto** (味・風味) などとも同系の関係にある。gusto はスペイン語経由の語である。

上記 Stone 被告への7~9年の求刑を数日後には Barr 司法長官も再考し、司法省は量刑を3年4ヶ月に軽減すると発表した。しかし Trump 氏はなお不満で、恩赦(pardon)を考えもした。

国家権力を行政権(administrative power)・立法権(legislative power)・司法権(jurisdictive power)の三権に分けそれぞれ独立機関とする上記、三権分立(the separation of the three branches of government)の原理で17~18世紀に英国の J. Locke (J.ロック) やフランスの C. Montesquieu (C.モンtesキー) らの啓蒙思想により唱えられ、近代国家で権力(power)の乱用を防ぐ理念となっている。しかしながらこの目に見えない power の概念が曖昧で誤解もされ、何かと問題となる例はこの世に際限がない。

**Basic 世界語彙 power** の PIE の音素形は/POTI/とされ「見えない力」の意味である。他の **Basic 世界語彙** では **possible** が同系で、見えない力であるがゆえ抽象性がある。非 **Basic 語彙** では **possess** (所有する) なども同系{pos (= power) + sess (= to be seated)}で「power のある人が座る」が原義である。一方、「見える力」は **Basic 世界語彙 force** である。Basic 世界語彙 **comfort**、プラス **α Basic 世界語彙 effort**、非 **Basic 語彙 fort** (砦)、**fortune** (富)、**afford** (余裕のある) などが同系 [power と force の同系語の他の例は同上拙著、第二部、例(102), (103)参照]。同系語(paronyms = words of the same root)に対し同義・類義語(synonyms)は **Basic 世界語彙** (p. 18) words でよいが括弧に入る語は? 正解は parallel となる。

内容的に見て(1), (2)の tweet 文に示されるような上から下を見下ろす権限(power)はとかく人間社会で越権行為、権力暴走、独裁を生む。それに抵抗して強制的な force が用いられるのが暴力や戦争である。power を言葉(words)で抵抗できなくなるとその言葉の延長線上で force となる。この2種の力による支配ではなく人間社会で上記、立法(legislation)による「法の支配(rule of law)」(to see things from the angle of the Law)という考え方が近代に生まれたわけであるが、これの本当の意味での見定めとなるとやはり難しい。law(法)が人間社会の秩序(order)を保つ instrument(ツール・道具) となっていて、上記のとおり instrument という英語が法律用語では「文書・証書」の意味となる。

政界のみならず人間社会での組織の中で power がはびこり越権行為がある。筆者が最も嫌うものである。関連しては19世紀の英国の思想家 J. S. Mill の *On Liberty* 『自由論』も参考となる。みずから power がなくてもあると見誤り他人に対するパワハラ(power harassment)という言葉も定着したが、法の支配のさらに上位には神の支配(the Rule of God)がある。power と同系語(paronym)ではなく類義語(synonym)で **Basic 世界語彙** に **authority** がある。語 power は EP 本 III, p.18 で導入されるが force は導入されない。The Meaning of Meaning では Chap. II で表題 THE POWER OF WORDS (言葉の力) として議論もされる。

上の(1), (2)の tweets で大統領(1期目)としての人間 Trump 氏の power (権限) と、司法長官としての人間 Barr 氏のそれをじっくり考えてみると改めて政治と法治(ほうち)という面からも power の意味を思索する機会とするとよい。メキシコ国境の壁とその建設に至る一連の過程も、まさに power と force を象徴するものだろう。なお、power といえばフランスの structuralist (構造主義者) M. Foucault (M.フーコー) が政治の世界と、上から下への権力の問題に特別に注目したことはよく知られている。

Trump 氏は派手な演出と劇場型の政治手法で power たる権力・権限を見せつける。みずから tweet 文にも終始それを見ることとなる。文末に exclamation mark (感嘆符) の!を頻繁に付し感情移入をする。上の(1), (2)の tweet 文例もしかりである。文の種類を大枠①平叙文、②Yes-No 疑問文、③Wh-疑問文、④感嘆文に分類すると氏の書く特徴ある文はいわば exclamation sentence (感嘆文) ばかりか? What a man! (何たる男だ!)、How strange! (何と奇妙な!) などと言ったり思ったりもされるが、日本人とアメリカ人では気質(かたぎ)・民度が異なり氏は本国で一方でよく理解もされ人気もある大統領(2期目)である。

以下、発展的にさらに関連する事項を扱う。まずは次の(a)~(d)の文を提示する。

- (a) **John** got the door open with a key.
- (b) **Did** John get the door open with a key?

(c) Who got the door open with a key ?

(d) What did John do ?

ここでは(a)は平叙文、(b)は Yes-No 疑問文、(c)と(d)は Wh-疑問文でそれぞれ太字体とした文頭の振り出し語が無標(unmarked)の場合での核となる要素で、英語文の場合それぞれ文頭に配置される語・要素がその文の thematization (主題化・テーマ化) を担うのである。focusing (焦点づけ) ということである。(a)のような文は John がそれを担うがこの世の中心に人間を据えるという基本的考え方からすれば特に問題はないとしておこう。(b)は「ジョンがドアを開けた」という情報が真か偽かを問うわけで助動詞 Did、(c)は「誰かがドアを開けたこと」は分かっているが、それが誰かの Who、そして(d)は「ジョンが何かの行為をした」ことを既知事項としその事の中身 What を問う文である。それぞれ情報論的に new (unknown) / given (known) information (新 / 旧情報) の提供法である。

ここでは特に上の③での Wh-疑問文 [具体例としての上の(c)と(d)] で振出し語となるいわゆる '5 W's & 1 H + which' (who, what, where, when, why, how, which) の 7つの interrogatives (疑問詞) に注目したい [実は what 以外の 6 つもすべて 'what' の意味を合わせもっている]。7つはバラバラなものではなく、一括性のある取り扱い方が手早い [④の感嘆文は典型的には what と how で示される]。ここで本連載(71)で言ったことを再度繰り返しておくが、これらのうち Basic では what は who からの派生 [what < who] とみて 850 語の語表には提示されないが、歴史的に what は who の意味であったことに由来することからすれば納得できるものである。また Basic では which も who からの派生 [which < who] とみるが、これも関係詞の which の所有格に whose があることからしても納得はできるもの。なお、Trump 氏の場合は 5 W's & 1H はやはり How much の加わった 5W's & 2H's ともなるか？

上での(a)のような單一文は現実には意味をもたない。文単位ではなく Text Grammar (テクスト文法) への注目であり、情報提供・談話構成上での流れ(discourse)から上記 thematization (テーマ化) や focusing (焦点づけ) という重要問題となる。7種の疑問詞 who? (人)、what? (事)、which? (選択)、where? (場所)、when? (時)、why? (理由・目的)、how? (方法) への注目は特別な意義がある。原点としての古代ギリシャの哲人 Socrates 風のいわゆる Socratic Questioning 「ソクラテス問答法」を想起させる。

この 7 種の疑問詞に答える形で構成されるのが text 文の深層構造と言える。text 照応(textual reference)関係で chiastic reference (交差照応指示) への注目も重要で、たとえば記述内容が交差する聖書言語の解釈・釈義(hermeneutics)ではこの修辞的(rhetorical)な照応関係からの text 分析が特別に有効となる。本連載(69), (71)でも触れた今日的な AI の thematic analysis of data and meaning (資料・意味の主題分析) の方法による pattern の発見とも符合する。

本連載(71)ですでに触れたのであるが、7つの疑問詞は本会で用いられる記号論(semiotics)・意味論(semantics)のプレ入門 EP 本は Bk I で提示順が what, where, which, who, when であり、what が最初の提示となる。what (p.30)、where (p.38)、which (p.48)、who (p.58)、when (p.65)の順で提示され、how と why は Bk II に回され how (p.14)、why (p.67)の順での提示となる。Bk III では巻頭から数頁に渡りこういう疑問詞が一気に用いられ、卷中で頻出し、卷末部から最終頁にかけてまたも一気に見こととなる。本連載(51)でも触れたが疑問詞は情報論的にも上記、生成 AI での Q & A による対話型とも関わる。なお、EP 本 III の旧版は今日的に内容の古い箇所があり目下は改編された Pippin 版(2005) が最新版で、文例ばかりでなく図絵も旧版にはなかったコンピュータ操作の人物や宇宙服を着た人物が描かれる箇所なども見ることとなった(p.40)。しかしもうこれも年数を経ているので、いずれ改編版が必要ともなろう。

EP 本の語釈で語の提示順と grading の問題に關し思索するには、本会 Year Book, No. 71 (2019)での拙稿で提示した「EP 本 I・II での語の提示順早見表」は簡便で、それぞれ貞順に語を見た瞬間に図絵(pictures)と共に内容がイメージ化できればよかろう。また、それはどうしても必要なはずだろう。独習主体の EP 本が ‘the Quickest Way to English’ であるなら短期間で処理もしてしまいたい。前回 L. W. Lockhart の “少しづつではなく一気に多くを” という Cambridge 大学で Ogden の助手を務めていた彼女の言葉(Basic 文)を引用したが再提示しておく。一般には「少しづつ」は時間をかける割に効果がなく要領は悪いだろう。

When learning a language, it is more rewarding to put in a great amount of work over a short stretch of time than to do only a little work at a time and take longer. (L. W. Lockhart)

英語の疑問詞は EP 本 I で上記 what を他の疑問詞に先がけ p.30 で最初に提示したその根拠には重要な含みがある。EP 本実践で Graded (段階式) と銘打つ限りやはりその the Semantically Sequenced Way (SS 法) をどのような流れで見るか? を示すべきとなる。元来、本会で the GD 法 (段階式直接法) が最良法だと思われてきた。しかしながら名称が独り歩きもし、踏み込まれるべきところまで踏み込まれていないので事実だろう。EP 本 I 最初の 20 頁程度から 30 頁程度までを新入会員などに「第 1・2 日目」とし意気揚々と示そうとされてきたが、ややもすれば自己満足的(self-pleasing)な側面はないか? あるように思われるがどうだろう。名目上の SS 法が徐々に断片的・単発的提示となり、やはり全体としての連續性・流れは不透明になると思える。冒頭で触れた神を垣間見る形にもなる EP 本 III 最終頁を含めた手(hands)を用いるのではない口(mouth)を用いる広範囲で総括的な実践の「最終日」なら如何なるものとなるか?

Rome was not built in a day. 「ローマは一日にして成らず」という英語の諺もあるが、EP 本に基づく意味論実践はもう少し突っ込みを入れる必要があろう。静岡県御殿場での集会を含め本会で半世紀以上に渡り似た内容のものが代々継承され今日に至っているが、幼児の母語習得と外国語としての言語修得は異な

るし、そもそも人に学習させる教授法なるものは単に印象では通らないわけで習熟度を推し測る具体的な「評価」(evaluation)も必要となる。pre- & post-test (事前・事後テスト) で post-test と pre-test をまったく同設問で調べる testing もあるが、pre-test での低得点が post-test で高得点となれば明確に効用ありの評価付けとなる。testing でのいわゆる客観テスト問題は小手調べ的なもので実用度は低い。日本ではやはり日本語↔英語の文字・音声を介した敏速な相互変換能力が実用的で、主たるテスト問題は結果を出す両言語の変換を扱うものとなるだろう。英語のいわゆるプロ職人である会議通訳者などの日英語には注目したいが、発話される生の英語の文字への書き起こし(transcription)などは結果を出すことで実用的である。

“Richards らにより Harvard 大学で開発された！”はよいが上記 SS の段階式で、さらに「英語を英語で」の D(direct)による直接法で EP 本 I-III を如何に適格に実践するか？「図絵」等と共に上記「手」を終始用いるものとは別の、もっぱら「口」で説く EP 本 III などの講読実践も考えたい [cf. C. C. Fries らにより Michigan 大学で開発された直接法]。Basic-through-Basic Way (BB 法) 実践は特に英語の非母語話者には難しいわけで、これには実際には Basic もかなり自在に使えることが条件ともなろうし、これまた難しい。SS も BB もその中身が一定の語を軸語とした例文提示的なものは、本連載(46)などでも触れた *Studies in the Way of Words* (1991) の著作でも知られる P. Grice の conversational postulates 「会話の公理」からも外れ本来の対話法・textual pattern practice とはなりにくい。本連載(69)での J. Austin 風の pragamatics (語用論) での illocutionary acts (発語内行為) の問題とも関わる。GD 法実践とその評価法での課題点と言えよう。評価法といえば本連載で必ず 5 回ごとに扱っている「演習」例や文中でしばしば提示している「試問」例は、内容理解度を優(A)・良(B)・可(C)・不可(F) 等での小手調べ的な評価法にはなるだろう。

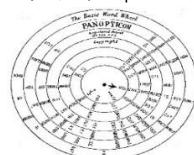
元来が semantic sequency (意味的連續性) の問題は目下、分野として確立してはいない。英語の母語話者で semantics の専門研究者 Richards らの提示した理論は大変優れてはいるが、日本の学校機関では非母語話者の日本人による日本人を対象とした英語学習であるわけで、この理論に立脚した実践はやはり容易ではなく相当な覚悟と研鑽が必要だろう。半世紀前とは違う意識面でのリセットも必要であろう。

本会も名称を BETS (ベツツ) [Básic English Training School] とでもすると研究内容が分かりやすく専門性も明確になるのか？30 年以上前になるが筆者はこの名称 BETS も本会の研究会会場（東京）で話として触れたことはある。今日的で最先端の言語理論に基づいた視点から若手で目下、大学院博士課程で研究中の院生の会員などにより本会での研究内容全体の見直し・発展・展開が今後なされてよかろう。

上述の疑問詞に論点を戻すが、特に Wh- 疑問詞の ‘what’ は what ... is などで代表される pseudo-cleft sentence (疑似分裂文) との関わりからも thematization としての主題化・焦点/重点づけ(focusing / weighing) の問題となる。John is reading a book. と Reading a book is what John is doing. では知的意味は同一でも機能(function)が異なる。このあたりをどう取り扱うか？EP 本 III とも関わる。また「感情移入」の empathy (エンパシー) 論として喧嘩などで加害者／被害者の「視点」(perspective / point of view) の問題、さらに voice (態) での能動態 vs. 受動態としての主語(subject)選定の問題等々ともなる。主語選定は深淵な主題化の問題へと発展もする。EP 本 II の巻末頁 (pp.154-156) で受動態(passive voice)を提示するが、どう処理するか？〔なお、英語の主語 subject {sub- (= under)+ ject (= to send)} は「神の下」も含意する〕。

5 W's & 1 H 疑問詞(5W's & 1H interrogatives)はモード・ファッショング言語(language of fashion)での象徴的な語でもあり、本会 Year Book での拙論「モード・ファッショング言語の rhetoric 体系と Básic English: semiotics (記号論) からのアプローチ」No. 74 (2022) ではこのあたりを示した。たとえば文 Why is she in that dress in a place like this today? には 5 W's 疑問詞 Why, Who, What, Where, When を連続的に見る。fashion 言語に関しては特別にフランスの structuralist (構造主義者) R. Barthes (R. バルト) に注目したい。関連してはその前々年度での Year Book での拙論「Básic English 研究の一視点：空間詞 ON と OFF」No. 72 (2020) ともつながる。これは hat (帽子) などの服飾・衣服(clothing)の着脱(on / off)行為とその位置移動 / 位置変化(transposition)の見方である。ポイントであり、2 点セットで参照されたい。

ところで上で perspective / point of view (視点) と言ったが、Ogden は *The ABC of Basic English* で Panopticon (パノプティコン) としての The Basic Word Wheel (Basic 語の車輪) を考案し提示した。



— C. K. Ogden, *The ABC of Basic English* (1932), p.183

Ogden はこの動的な「語 (コトバ) の車輪」の 7 つの輪を適宜、手で動かせてみることで英語での基本 pattern 文を思索する方法を示唆したが、関連し次のように Basic 文で記す箇所がある〔下線は筆者〕。

Words like these may seem at first to be of no use whatever ; but “I might take the strange key through the glass slowly” is quite a possible statement for a story like “Alice through the Looking-glass”. (Ogden, *ibid.* p.186)

すなわち、この車輪を回し動かせることで生み出される文 I might take the strange key through the glass slowly. など、当然ながら意味の不透明な例や不成立の例も出てくる。しかしながらこの場合の“カギ(key)を鏡(looking-glass)から取り出す”は、Lewis Carroll の作品『鏡の国のアリス』なら視点(point of view)を変えて見る世界として成立すると言っている。興味深い説述で注目に値する。 (2025.11)